

## 河村陽詩さん 優良賞受賞

6月11日(土)に行われた坂祝町青少年町民の集い～元気なさかほぎ発表会～で青少年の主張発表を行った河村陽詩さんが、第44回少年の主張岐阜県大会～わたしの主張2022～中濃地区選考会で4市6町1村の参加中学生2,236人の中から優良賞を受賞しました。おめでとうございます！



## 「大じいさまの昔の話」

坂祝町立坂祝中学校 3年 河村 陽詩

とつぜんですがみなさん、「第二次世界大戦」という言葉を聞いて何をイメージしますか。きっと、沖繩戦、広島・長崎への原子爆弾の投下、敗戦といった言葉が浮かぶのではないのでしょうか。

戦後七十七年、その戦争の中で生きてきた人々は、戦争で亡くなった方、その後的人生で歳を重ねて亡くなった方が多くみえます。当時の人が少なくなっている今、私たちがその戦争の時代を知ることができる機会は、少なくなっています。未来へつなぐために、過去に何があったのかを知る必要があると私は思います。

私は曾祖父のことを大じいさまと呼んでいます。私は、小学三年生の夏休みの作品で、大じいさまの話を書いてまとめ、中学一年生の時にそれを再度詳しく調べました。大じいさまは、大正十五年に開市で生まれました。今、九十六歳です。九人兄弟の五番目、四男として育ちました。大じいさまが子どもの頃は、農業をしている家を手伝いながら、今でいう小学一年生から中学二年生までが通う学校、尋常小学校へ通っていました。当時は、麦とさつまいものお粥が毎日のご飯で、今私たちが毎日のように食べている白ごはんはご馳走だったそうです。そして、大じいさまが十四歳の時、今はない満州国への開拓団、満蒙開拓青少年義勇

軍へ志願したそうです。今の私と同じ年齢の時に、親の印鑑を勝手に使って書類を揃えたと聞いて、その行動力に驚きました。当時の満州国は、満州事変のあとで建国されたそうです。開拓軍というのは、満州国の土地を開拓して、その地域が日本のものになれば開拓した地域の権利がもらえるという内容でした。日本にいと、家族・兄弟が多いため、大人になっても畑や田んぼを分けてもらえないと思っただけではと考えました。そして大じいさまは、尋常小学校の卒業式前に満州に渡ったのです。満州国に渡った大じいさまは、満州国の開拓を毎日していました。しかし、第二次世界大戦が始まって、満州の内での現地招集がかかりました。大じいさまのお兄さんも出兵でその場所にいたようですが、一日差で会えず、お兄さんは戦死されたそうです。

それからは、義勇軍での生活が続いていました。一九四五年の夏に終戦を迎えましたが、大じいさまたち義勇軍の方々は、終戦したことを知らなかったそうです。その冬、ソ連、今のロシアの兵に囲まれて、武器を捨て、ソ連の捕虜になりました。そこでは、強制労働をしていたので、一緒にいた多くの仲間が亡くなったそうです。三年後に大じいさまは、生きて日本に帰国することができました。

今の大じいさまは、認知症がとて

んでいるため、もうこの話ではできません。最後まで覚えてくれていた、呼んでいてくれていた私の名前も言ってくれませんでした。でも私は、教科書に載ってもいいほどの経験をしてきた、そんな人生を今もなお歩み続けているすごい人だと思っています。

聞くことができる時間はもう少ないです。

今、ロシアがウクライナを攻撃して、沢山の方々が亡くなり、避難生活をされています。私は、戦争という国や独裁者の身勝手な判断・行動は、その国にいる一人ひとりの国民の方々に逆に見せられているのではないかと、とニュースを見るたびに思います。第二次世界大戦のときに辛い苦しみ味わった私たちの国、日本の人々でさえ知っている人は少ないと思います。

戦争は、決断していいことではありません。戦争をして待っているのは「悲劇」、ただそれだけです。

皆さんは今、私の話を聞いてどう思いましたか。少しでも戦争の醜さや悲劇が伝わっていただければ嬉しいです。私は、戦争を経験している身内から聞いて学んだことや教わったことを、私の周りにいる人たちに広め、戦争の悲劇を伝えていきます。